

タラノメの前進出荷技術

伊藤 美和

(山形県立農業試験場最北支場)

Early Harvesting Techniques on the Bud of Angelica Tree (*Aralia elata* Seem)

Yoshikazu ITO

(Saihoku Branch, Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

タラノメの促成による早出し栽培は、価格的に高く取引されているため各地で関心が高まり、これまで難しいとされた12月出荷もジベレリン処理による休眠打破技術^{1, 3)}の確立により可能となった。

最近の出荷状況は、12月出荷も見られるが2～3月の出荷量が最も多く、価格面では、12月次いで4月が高値で取引され、出荷量の多い2月が安値となっている。

これらの背景をもとに、出荷時期の拡大と価格の安定を図るために、収穫出荷時期を前進させ、11月中に出荷することをねらいとし、一芽ざし水耕法により、ジベレリン処理濃度について検討したので、その結果を報告する。

2 試験方法

(1) 供試材料及び方法

当場養成の在来系統(トゲ有)を用い、穂木は、伏せ込み2～3日前に採取し、頂芽を含む3～4芽を除いた一芽ざしとした。

伏せ込み時期は、11月10日、11月19日の2回行い、ジベレリン処理濃度は、0・50・100ppmとし、穂木の伏せ込み時に噴霧処理をした。50・100ppm区では、更に、萌芽開始頃(伏せ込みから7～8日目で芽の部分が僅かに緑色を呈した時期)に25ppmを噴霧処理をした。

(2) 管理概要

促成方法は、ウレタンマットを使用した水耕法とし、温度は、温湯をパイプに通し循環させ、温める温湯配管により確保した。伏せ込み床は、ビニール+保温マットで被覆

し、温度は、15～20℃の範囲に設定した。更に、伏せ込み床の温度調節のため11月20日～12月4日まで温室内を遮光シートで被覆した。

水管理として、穂木に十分吸水させるために、伏せ込みから5日前後は2～3cmの深さに水を保ち、その後は落水し、ウレタンマットが湿っている程度とした。

3 試験結果及び考察

(1) ジベレリン処理による収穫時期及び収穫期間

2回の試験ともジベレリン処理区は、伏せ込みから収穫始めまで15～17日で可能となり、収穫期間も11～15日で終了した。無処理区の場合、伏せ込みから収穫始めまで28～30日、収穫期間は35～41日を要し、伏せ込みから収穫終了までの日数は、11月10日区で71日、11月19日区で62日を要するのに対して、ジベレリン処理区は、いずれも30日間程度で終ることから、その処理効果が認められたが、50、100ppmの濃度による差異は見られなかった。

収穫芽割合が、無処理区で57～58%、ジベレリン処理区で82～93%となった。この原因は、伏せ込み床内の高温により穂木が腐敗したためで、特に、無処理区は萌芽まで長期間を要することから腐敗したものが多かった。このことから、この時期の促成栽培では高温防止対策が一つの課題と言える(表1)。

(2) 収穫芽の品質

収穫芽の長さ、基部径、重さについては、ジベレリン処理区は、収穫芽の長さでは無処理区と大きな差は見られないが、基部径、重さで大きな差異が見られ、特に、芽の重さは、無処理区の2.3～2.6gに対し処理区は5g以上となっ

表1 ジベレリン処理による収穫期間(1990)

伏せ込み日 (月・日)	GA処理濃度 (ppm)	収穫始日 (月・日)	伏せ込み ～始日 までの日数 (日)	収穫終日 (月・日)	収穫期間 (日)	伏せ込み ～終日 までの日数 (日)	収穫芽割合 (%)
11. 10	0	12. 10	30	1. 20	41	71	58
	50	11. 25	15	12. 7	13	27	93
	100	11. 25	15	12. 5	11	25	82
11. 19	0	12. 17	28	1. 20	35	62	57
	50	12. 6	17	12. 19	14	30	87
	100	12. 5	16	12. 19	15	30	92

た。処理濃度間差では、100ppm区が50ppm区より優る傾向であった。

規格別分布では、無処理区は、萌芽するまで長期間を要すると共に、一斉に萌芽しないことや1～2枚の葉が異常に伸びたり、横に広がるなどの奇形芽が見られたことから芽の重さは、3 S規格の4 g未満がほとんどであった。

一方、処理区は、S規格の6 g以上の比率が50ppm区で32～41%、100ppm区で36～54%といずれの時期も100ppm区が上まわり、この時期の処理濃度は100ppm処理が

収穫芽の重さを確保するのに効果が高いと言える。

また、伏せ込み時からの収穫芽割合を5日単位で比較すると、無処理区は、収穫始めが28～30日以降となり、その後も緩慢な萌芽傾向が見られた。処理区では、15～17日から収穫可能となり、早い時期にS規格の6 g以上のものが得られ、30日以内で収穫は終了した。処理濃度の違いは、菅原らの報告³⁾にもあるが、収穫盛期は50ppmより100ppmの方が早まる傾向にあった(表2)。

表2 収穫芽の品質(1990)

伏せ込み日 (月・日)	GA 処理濃度 (ppm)	収穫芽 (平均)			収穫芽の規格分布 (%)				伏せ込み時からの収穫割合 (%)								
		長さ (cm)	基部径 (mm)	重さ (g)	M (8 g以上)	S (6 g以上)	2 S (4 g以上)	3 S (4 g未満)	10日 ～15日	16 ～20	21 ～25	26 ～30	31 ～35	36 ～40	41 ～45	46 ～50	51～
11.10	0	6.3	11.7	2.3	—	—	—	100	—	—	—	13	16	18	11	24	18
	50	7.6	16.8	5.7	9	32	50	9	5	71	16	8	—	—	—	—	—
	100	7.8	17.4	6.1	11	43	43	3	14	65	14	7	—	—	—	—	—
11.19	0	6.0	12.9	2.6	—	—	—	100	—	—	—	4	38	4	8	15	31
	50	7.0	15.4	5.2	—	32	54	14	—	18	58	24	—	—	—	—	—
	100	7.0	15.6	5.5	3	33	52	12	—	22	67	11	—	—	—	—	—

4 ま と め

(1) タラノメを11月中に収穫出荷するには、11月10日前後の伏せ込みで可能である。

(2) この時期におけるジベレリン処理濃度は、価格に直接反映する収穫芽の重さを確保するためには100ppm処理の効果が高いが、50ppm処理でも対応が十分可能と思われる。

この試験は、ジベレリン処理区(50, 100ppm)に対して萌芽始め頃(伏せ込みから7～8日目で芽の部分の僅かに緑色を呈した時期)に、25ppmを処理したが、これに対比する区を設定しなかったものの状況から判断すると、この2回処理により休眠打破、更に、生育の促進が図られた

ものと推察される。

(3) 一芽ざし法は、穂木の側芽の大きさ、揃い等に左右されることから、これらの適性を有する系統の選定並びに穂木養成期間における栽培管理技術²⁾が重要である。

引 用 文 献

- 1) 細木高志, 浜田守彦. 1984. タラノメの12月促成及び抑制栽培. 農及園 59: 945～946
- 2) 中山茂則. 1980. 有利な野菜タラノメの栽培法, 農及園 55: 1509～1515
- 3) 菅原和仁, 金野義雄, 佐藤忠士. 1985. タラノメの早出し栽培. 東北農業研究 37: 253～254